

2016.7.23 09:25

「明和大津波」発生源か 琉球海溝南部で断層確認

江戸時代の1771年に、現在の沖縄県の先島諸島を襲った「明和の大津波」を起こした可能性のある海底の断層を琉球海溝南部で確認したとの調査結果を、海洋研究開発機構などのチームが22日付の英科学誌電子版で発表した。

九州南方から台湾に向けて延びる琉球海溝では、陸側のプレート（岩板）の下にフィリピン海プレートが沈み込んでいる。断層は、深さ15キロのプレート境界から枝分かれする分岐断層で長さは50～60キロ以上にわたる。台湾の研究チームが付近で数年前に見つけていたが、地下探査や海底地震計を用いた今回の調査で位置や地下の形状が詳細に分かったという。

また、より深い地下15～25キロのプレート境界では、比較的ゆっくりとしたすべりで津波が大きくなりやすい低周波地震が多く起きていることを確認。探査データの解析から、プレート境界や分岐断層には水が多く含まれていて、ゆっくりしたすべりの原因になっていることが推定された。

海洋機構の新井隆太研究員は「琉球海溝南部では、揺れの割に大きな津波を伴う津波地震が起きやすいことを改めて裏付けた」と説明。津波地震は数百年間隔で起きると考えられており、海底の地殻変動観測を充実させるべきだとしている。

確認した分岐断層は、琉球大の中村衛教授（地震学）が推定する明和大津波の震源域と一致した。

中村教授は「分岐断層を含むプレート境界で起きた地震による津波」としているが、新井研究員は「どちらが発生源かは、まだ特定できない」と話している。

©2016 The Sankei Shimbun & SANKEI DIGITAL All rights reserved.